

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

二 捜索する男子と訪問する女子 その2

インヨウ・カオス
(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

二 捜索する男子と訪問する女子 その2



「役に立てなくてすまないね」

祓いの儀式を終えた後に夏美さんはそう言つた。

結論から言うと、夏美さんの「祓い」はアオイさんには効かなかつた。

「やつぱり、悪意のない靈には効かないのか……それとも……」

夏美さんは考えるようにして呟いた。

「……すみません、ご迷惑をおかけして」

ひつそりとした声でアオイさんは夏美さんに謝つた。

「いや、俺の方こそ何もできなくて頭を搔きながら夏美さんは言つた。

「あ、あの。今日はありがとうございました」

儀式が終わつた頃には、もう外は橙色になつていた。

「それで、あの……料金はいくらに……」

帰る前に、私はそう夏美さんに訊ねた。

「料金?　ああ。知らない、知らない。最初に言つたけど、俺は別にこれで生活している訳ではないから」

「で、でも……」

「子供がそういうの気にするなつて」

軽く笑いながら夏美さんは言つた。

「あ、ありがとうございます!」

私は夏美さんの厚意を素直に受け取る事にかけ

「もし、何か困つた事があつたらこの番号にかけて」

紙に電話番号を書くと夏美さんは、それを私に渡した。

「あ、それだつたら今のうちに番号を交換しておきませんか?」

私は携帯を取り出してそう言つた。

「ああ……そうだね。俺もアオイさんの事で何か思いついた事があつたら連絡するよ」

携帯番号を交換した後に、改めてお礼をしてから、私とアオイさんは夏美さんのお家を後にした。

「……すみません、たまさん」

帰り道、ふとアオイさんは私にそう言つた。

「うん?　何がですか?」

「いえ、私の事でいろいろとして頂いて、申し訳なくて……」

アオイさんの可愛らしい声に少しだけ、悲しそう

な感情が混ざっていた。

「謝らないでください。私も自分からアオイさんに

関わりたいと思つて、行動していますから」

最初、シマさんがアオイさんを連れてきた時は、どうしたらしいのかと正直、困った。

だけど今は、関わったからにはアオイさんにとつて良い結果になるように行動できたらなあ、と思つている。

「あ、そう言えば……」

私はふと、アオイさんと夏美さんとの会話の中で感じた、引っ掛けたりについて思い出した。「夏美さんが、『この世に気がかりな事があるんじやないか』って訊いた時に、アオイさん、何か言い淀んでいたように私は感じたんですけど……」「それは……」

私の問いかけに、アオイさんは困ったような顔をした。

「あ、別に言いにくい事ならいいんですけど。私の勘違いかもしれないし」

そう私が言うと

「……いえ。もしかしたら私には、『あの世』に行きたいと願うのと同じくらい、強く思つている事があるのかもしれません。夏美さんに問われて、初めて意識したのですが……」

慎重に告白するように、アオイさんは言つた。

「それって、何ですか？」

「……少し前に、私には仲の良い友達がいました。ですが、私は彼女の……アキホの力にはなれなかつた……」

苦しそうな表情でアオイさんは言葉を絞り出した。

「アオイさんは、そのお友達のアキホさんの事が気になつていてるって事ですか？」

「……はい、多分」

「そう……ですか」

泣き出しそうな表情でアキホさんの事を話すアオ

イさんを見ていると、私の心も苦しさを感じた。

夜に近いせいか、薄暗い影がアオイさんの顔を覆つていた。



「お願いします」

坐道の提案を聞いたアキホさんは、間をおかずにそう言つた。

「アキホさん、坐道の力はあなたの魂と引き換え、という事です。それでも……」

「構いません。それでアオイに会う事ができるのな

ら

アキホさんの目には揺るぎのない想いが宿つてい

た。

「……分かりました」

アキホさん自身が決めた事に対し、僕は何も言える訳がなく、ただ頷いた。

「おつけー。それじやあアキホさん、ちょっとこつちに来て」

坐道は手招きしてアキホさんを近くに呼んだ。

「坐道、この場でその力を使うのか？」

岩男さんは周囲を見渡してから言つた。

「昼過ぎのこの時間帯、僕たちが立っている道の周辺には、歩いている人などはいなかつた。

「うん、周りに人は見えないし。すぐに終わるから」

言いながら、坐道は背負っていたカバンから何かを取り出した。

「はい、この紙を握って」

短冊のように細長い紙を、坐道はアキホさんに渡した。

「次に、目を瞑つて、心の中で会いたい人の姿を強く思い浮かべて」

「は、はい」

「それじやあ、やるよ」

坐道は左手で片合掌をすると、何かを唱え始めた。

その言葉は聞いたことのない言語で、どういう意

味が込められているのか、僕には分からなかつた。

「……はい、終わり」

唱え始めて二分くらい経つてから、坐道は言った。

「もう、いいの？」

何だかあっけなく終わった感じがして、僕は思わず訊ねた。

「うん。今回は、術をかけられる側も同意しているから時間はかかるないよ」

「こ、これで私はアオイに会えるのでしょうか？」

不安そうな表情でアキホさんは訊ねた。

「会えるよ。そうだなあ……早ければ、数日以内には」

坐道は続けて言つた。

「ただ、どんな出会い方をするのかはボクにも分からぬ。縁を繋げただけだからね。だから、アオイつて靈を探す行動自体は続けた方がいい」

「おい、坐道。その術は、その……アキホさんの魂と引き換えなのだろう？ そこら辺はどうなんだ？」

岩男さんが訊ねた。

「この術はアキホさんの魂を燃料として発動する。簡単に言うと、アオイって靈に出会つたら、直ぐに

アキホさんはこの世からいなくなる」

本人が目の前にいるというのに、坐道は特に配慮

などはしないで説明した。

「……私の心残りは、アオイと会いたいという事だけです。その後にどうなつても、後悔はないです」

顔を下に向けてアキホさんは言つた。

「……もう夜だ。今日は一旦、帰る事にしないか?

明日また、アオイさんの搜索を続けよう」

岩男さんは軽く両手を叩いて、そう言つた。

「アキホさん、どうしますか?」

俯いているアキホさんに僕は訊ねた。

「そう……ですね。今日も手伝つて頂いて、ありがとうございました」

頭を下げて、アキホさんはそう言つた。



「夕飯、何食べようかな」

コンビニに向かいながら私は呟いた。

もう空は暗く、帰宅途中らしい人たちが道を歩いていた。

「今日は何とか夏美さんに会う事が出来て良かったな……」

祓いの儀式はアオイさんには効かなかつたけど、少しは状況が前に進んだような気がする。いろいろと考へていると、あつという間にコンビニについた。

「いらっしゃいませー」

レジの方から控えめな店員さんの声が聞こえた。

「おにぎりとかでいいかなあ」

本当は自炊した方がいいのだろうけど、今日は疲れたのでコンビニで夕飯を買う事にした。

母さんが帰つてくるまでの数日は、何度かこの店に、お世話になりそうだ。

「……ん?」

商品を見ていると、ふと店内に、何となく目を引く人達がいる事に気が付いた。

その人達は、パンのコーナーの方にいた。

二人組で、一人は私と同じ年くらいの男の子だった。

整つた顔に、サラサラとした髪。いわゆるイケメンと呼ばれる部類の人だ。

もう一人は、身長が高めの女性で、髪は綺麗な金色のセミロングで、こちらも整つた顔をしていた。だけど、女性の方は纏つてゐる雰囲気に、少し威圧感があるようを感じた。

二人ともこちら辺では見た事がない。観光客だろうか?

私が目を奪われている間に、商品を選び終わつたのか、二人ともレジの方へと向かつて行つた。

「つと、私も夕飯選ばないと……」



れに関する事だろうか？

連絡を受けた私は放課後、一旦家に帰つてから夏

美さんのお家へと向かう事にした。

今回は、シマさんも同行する事になつている。

今出てきたばかりのコンビニを、僕は振り向いて見えた。

「リョウ君、どうしたの？」

岩男さんは僕に訊ねた。

「店の中で見かけた子が何となく気になつて……」

「ん？　ああ、私たちの方を見ていた女の子ね。何か気になる事でも？」

「いや、特には……」

なぜ気になつたのかは僕自身もよく分からない。

なぜだろう……。

「帰りましょう」

「気のせいだ。と、気持ちを切り替えて、僕は歩き始めた。

☆
「少し試してみたい事があるんだ。家に来てくれないか？」

そう、夏美さんから連絡がきたのは、初めてお家を訪ねてから二日が経つた日の朝の事だった。
アオイさんから聞いたアキホさんという友達の事については昨日、夏美さんに電話で伝えたから、そ

あつという間に学校での時間は過ぎて。

放課後。

家に帰つた私は、着替えようかな？　とも一瞬思つたけど、面倒なので制服のままで行くことにした。

「ねえ、夏美さんってどんな人？」

夏美さんのお家へと向かう途中、シマさんが何気なくそう訊ねてきた。

「うーん……三十歳くらいの男の人で、髪は短め……」

「いや、見た目の話じゃなくて。ほら、何か……雰囲気というか」

「雰囲気ねえ。初めて見た時は、テンションが低めの人だな、って思つたけど……」

「ふーん……」

私の答えに微妙な反応を示すシマさん。

「なに？　シマさん何か気になつてているの？」

家を出てからずっと、ソワソワしている様子のシマさんに私は訊ねた。

「いやー、『霊能力者』っていうの？ そういう人には会うのは初めてだから、何か緊張しちゃって……」

「んー……家系は代々そういうった仕事をしていたら

しいけど、夏美さん自身は、靈に関する仕事はしていないらしいよ」

夏美さんとの会話を思い返しながら、私はシマさんに言つた。

「そうなんだ」

「安心してよ。急にシマさんを祓つたりする人ではないから」

冗談交じりに私はそう言つた。

歩いて四十分程で、夏美さんのお家に到着した。

「あれ？ 車が止まっている……」

夏美さんの家の前に、黒色の車が止まっていた。前に来た時にはなかつたけど……。

ピーッと、私はインターほんを鳴らした。
ガチャ、と直ぐに玄関は開かれた。

「こんにちは、夏美さ……」
「お、もしかしてあなたが、たまちゃん？」

「は、はい……」
出てきたのは、夏美さんではなくて女人の人だつた。

「おい！ 勝手に出るな、理華！」

知らない女性の登場に戸惑つていると、夏美さん

の声が部屋の中から聞こえてきた。

「お前は部屋で待つていろ！」

夏美さんは女人を玄関から室内へと押しのけ

た。

「よく来てくれた。入つて」

疲れたような表情で夏美さんは言つた。

「失礼します……」

今女性は誰なのだろうか？ と、疑問に感じながら、私とアオイさん、シマさんはお家の中へと入つた。

「数秒ぶりー」

リビングに行くと、さつきの女人がソファーに座つていた。

「先に紹介しておいた方がいいかな……そこに座つている胡散臭そうな奴は與那城理華（よなしろりか）と言つて俺の……知り合いだ」

面倒くさそうに夏美さんは女人、理華さんを紹介した。

「知り合いだなんて冷たいなあ。小学校時代からの親友じゃない、みつちゃん」

口を尖らせて夏美さんに抗議した後に、理華さんは私たちの方を向いた。

「あ、私は湖たまつて言います……」

頭を下げて私は自己紹介をした。

「よろしくね、たまちゃん。私の事はヨーカつて呼

んで」
ニッコリと笑顔で理華さんは言つた。

「それで、たまちゃんの後ろにいる二人がアオイさんとシマさんね」

首を伸ばして私の後ろを見ながら理華さんは言つた。

「あー……理華も俺と同じで靈が見えたりする」

夏美さんは付け加えて説明した。

「俺と違つて理華は、『そういった』ものに関わる仕事をしている。だから何かアオイさんの事に関して、助言を得られればと相談してみたのだけど……止めときやよかつたかな」

はあ、と夏美さんは溜息を吐いた。

さつきからの理華さんに対する態度を見ていると、とても仲良しといった関係には見えないけれど……。

「……悩んでもしようがないか。話を始めよう」
どうぞ座つて。と夏美さんは、理華さんが座つていらない方のソファーアを勧めてくれた。

しかし。

「あ、たまちゃんは私の隣に座りなよー！」

ポン、と隣の開いている部分を叩きながら理華さんは言つた。

「は、はあ……」

どのソファーに座つたらいいのか少し悩んだけ

ど、結局私は理華さんの隣に座る事になった。

何を遠慮しているのか、シマさんは私が座つているソファーアの後ろに立つた。アオイさんも、静かにシマさんの横に並んだ。

「おい、理華。湖君に変な事するなよ」

対面のソファーアに座りながら、夏美さんは理華さんにくぎを刺すように言つた。

「分かってるつて。……ガミガミ言う男はモテないよね、たまちゃん」

「は、はあ……」

り、リアクションがしづらい……。

「それでも、制服女子と知り合いなんてやるね、みっちゃんも」

「……軽口ばかり叩いていると、家の前に止めているお前の車、潰すぞ」

「やだなあ、ほんのスキンシップじゃない。久し振りに、親友に会えて私はテンションが上がつているんだよ」

「お前はいつもそんな感じだろ……」
今日は可愛らしい女の子が三人もいるから、むしろいつもより調子が良くなつてきただぞお」

「……湖君、今日来てもらつたのは」
面倒になつたのか、理華さんを無視して夏美さんは話し始めた。

「前とは別の方法を試してみたいと思っているから

だ

「別の方法、ですか？」

「ああ。昨日、君から、『アキホ』さんの事を電話で聞いてから思いついたんだが……」

夏美さんはアオイさんに視線を向けて言つた。

「アオイさん。あなたはアキホさんという人に関しても、心残りがあるのですか？」

「……はい、多分。私がもし、この世に執着があるとしたら、それくらいしか思い当たりません」

静かにアオイさんは言つた。

「そうですか」

頷いて夏美さんは続けて言つた。

「あの世に行きたいというアオイさんの願いを叶える事は、現状では難しいのでは。と、俺は考えている。靈が望んでこの世から去ろうとしているのに、それができていないこの状況 자체が珍しい」

「祓いも効かなかつたらしいねえ」

アオイさんを見て、理華さんは言つた。

「なぜアオイさんがあの世に行けないのかと、考えてみたんだが……」

指を組んで、夏美さんは続けて言つた。

「俺の今までの、靈がらみの経験と照らし合わせて考えてみると、やっぱりアオイさんのこの世に対する強い想いが関係しているのだと思う」「そう考えるのが一応、妥当だよね」

夏美さんの考えに理華さんは、うんうんと頷きながら言つた。

「だから、まずはそのアキホさんという人物に、アオイさんは会った方がいいと思う」

「アキホに……」

夏美さんの提案を聞いて、アオイさんはそう呟いた。

「そうです。アオイさんが思いつく心残りを無くしていけば、結果的に、『あの世』にもいけるかもしない」

「な、なるほど！」

夏美さんの考えを聞いて、私は頷いた。

「まあ……断定はできないけどね」

苦笑しながら夏美さんは言つた。

「そこはビシッ！」と、力強く断定しなさいよ

理華さんが茶々を入れた。

「うるさい。俺はお前と違つて慎重なんだ」

「慎重じゃなくて、『繊細』でしょ……」

と、理華さんはぱつりと言つた。

「どうですか？ アオイさん。アキホさんに一度会つてみた方がいいと俺は思うのですが」

夏美さんはアオイさんに訊ねた。

「アキホに……でも……私は……」

夏美さんの提案を聞いたアオイさんは、少し困惑しているように見えた。

「アキホさんの事で、心に強い感情が渦巻いている
ねぇ。やっぱり、『そこ』に何かあると私も思う
よ」

アオイさんの様子を見て理華さんは言った。

「何か、会いたくない理由でもあるのですか？」

夏美さんはそうアオイさんに訊ねた。

「いえ、そういう訳ではないのですが……」

数秒、何かを考えて、アオイさんは続けて言つ

た。

「……私は……アキホに会いたいです」

顔を上げたアオイさんは、心の中で何かを決心し
たように見えた。

「アキホさんの住んでいる所は分かりますか？」

「分かります。ですが……」

顔を曇らせて、アオイさんは続けて言つた。

「アキホはもう……死んでいるので、そこに行つて
も会えるかどうかは……」

「え？」

驚いて、私はアオイさんを見た。

アキホさんが亡くなっているなんて、今、初めて
知つた。

「申し訳ありません。早く伝えようとは思つていた
のですが……アキホとの事を思い出すと心が苦しく
て……今まで言えませんでした」

頭を下げてアオイさんは言った。

「なるほど、なるほど。やっぱりそのアキホさんが
重要な鍵になりそうだね」

アオイさんの様子を見た理華さんは、そう言つ
た。

「今日は、みっちゃんが久し振りに、『相談』に乗
つているって言うから見に来ただけ……のつもりだ
ったんだけど」

理華さんはニヤリと笑うと、夏美さんに顔を向け
て言つた。

「これは私の出番かなあ？」

「……あまり気乗りはしないが、その方が確実か」
本当に気乗りしていない様子で夏美さんは言つ
た。

つづく